



迎えた結婚式の朝は、静けさと秋のほのかな寒さに包まれていた。風も穏やかで、薄い雲が朝日を受けて瑞雲が浮かぶようだ、と組員が口にした空が広がっていた。

良い一日になりそうだ。そんなことを誰しもが思った。それは同時に、この縁談が今後を色よくする方向に向かわせるのではないかと式当日になってようやくそんな気持ちを多くの者の胸に思わせた。

今日の結婚式の主役である春花は、日の出よりも少し前に床から起きた。そして、この日のために、彼女よりも早く起きて仕事を始めているだろう者たちによって用意された風呂で、手早く湯浴みをした。式当日の朝日の中で、湯を浴び身を清める春花は、この時何を思っていたのか、それは誰にも分からない。

それから、間を置かずに獅士堂邸の大門前から、式場に向かう者たちの第一陣の馬車が走り出した。

迎賓用の装飾の施された大型の馬車で占められる第一陣の五台には、春花をはじめ身の回りの付き添いや、四聖の白峰や立場が強い幹部、隊長の一部が二十人ちかく乗っていた。式に参列する他、式自体の警護や会場周辺の警備の指揮役として向かうのだ。

会場の警備の主な人員は、式会場のある境界線上の土地を含む青刃より出されることになっている。

そして、さて、いよいよ当日だね、と第二陣の馬車に乗り込んだのは、雪絵だ。

彼女は新婦の親族の一人として、式に列席することになっている。傍らに左馬ノ介もいて、共に馬車で会場に向かう。しかし左馬ノ介は式自体には同席せず、彼が会場に向かうのは義姉の付添役としてである。

左馬ノ介は、式場へと走る馬車の中で、対座する雪絵を視て言う。

「綺麗な着物ですね。髪も素敵にまとってます。でも、今日の主役は姐さん

ですよ」

「それはどうも。それに、分かっているよ。それに、幹部の会合とか特別な席じゃなきゃ、こんな上等な着物を着たり髪をひつつめたりしようと思わないし」

「そうですね。ところで、主役といえば、結婚式といえば、白無垢ですよ。姉さん、姐さんがあんまり綺麗だからって、感極まって泣いちゃいけませんよ」

釘を刺す左馬ノ介に、雪絵は「泣かないよ」と口を尖らせて答えた。

馬車は武蔵野から甲州街道を通り、ほどなく青刃のシマの江戸外堀に入る。そして、目的地の神楽坂近辺に近づく。

式は、長月の末日二日を使って二回行われる。それは、獅士堂が仏門の大きな家柄で、辰ノ神が神道、神社の大きな格の家柄であることから、両方の顔を立てる為だ。縁談の話が双方で進めるうちに、この仏式、神式のどちらで挙式を執り行うべきかということが問題のひとつにあがり、それで話し合った結果、どうせやるならば両方の式を挙げよう、ということになったのだ。

そして、今日一日目の式は、辰ノ神主導の神式である。互いに信用の証として、境界線上の双方のシマの寺社で式を執り行うこととし、先手は辰ノ神側の神社での挙式というわけだ。

左馬ノ介は、現在の情報収集の仕事や、以前の暗殺組織での役回りなどでも、この境界線上を超えるという事を何度となく行っていた。その時にもうまく何気ない風を装い事なきを得てはいたものの、やはり東と西というだけでどうにも異分子が入り込んだときの周囲の気配が違う。露骨なモノではないが、あれはよそ者だ、という静かに刺さる棘とでもいうべき視線や気配が感じられるのだ。それは単独での徘徊であろうとも、じんわりと疲れるモノだ。

それで、二日目の仏式の挙式を東の日暮里あたりで行ううえで、雪絵がそれにも参加するとなると、その日は今日の比ではないくらいに義姉の身に気を配らなければならない。ただでさえ、春花の身の上の心配を組全体でしているところなのである。

雪絵のことを優先したい左馬ノ介の様子によっては、お目出度い日に余計なしこりを作りかねない。それを左馬ノ介は自分がどう思われても別にいいと考

えても、それで雪絵が余計な気苦労をすることになっては、彼も目も当てられない。

左馬ノ介はそんな事情を抱えているので、雪絵が一日目の西のシマの式のみで参列することを聞いて、正直少し肩の荷が軽くなった思いだった。だがそれも、本筋ではない、と左馬ノ介は一人考える。

そう。この日の本番は――主役は、やはり左馬ノ介が口にした通り春花であり、そして東西二大家のトップが結婚するということが、無事に果たされるかどうかなのである。

到着した式の会場になる場所は、赤城神社というところだった。

神社の周囲や参道のそこそこに、そのスジの者と思しき羽織袴の正装の男たちが立ち、社務所や境内を歩いている。その眼光は彼らの普段からの在り方以前に、いつも以上の鋭さがあり、周囲にその視線をやり、あるいは他の者となにやら話し合っている。

雪絵と左馬ノ介は馬車から降り、行く先に広い階段の見える神社の鳥居をくぐる。

この時、左馬ノ介は、そういえば、と鳥居を視る。そこには、傷痕を補修した様子が見受けられた。

これは何の因果か、と左馬ノ介は気付いた様子のない雪絵に続いて鳥居から先に進む。

式の準備をしている社務所に雪絵たちが顔を出すと、まず入り口で仁美に出くわした。

「本日は、ようこそお越しくございました」

と、普段の活発さとは打って変わった大人びた様子で挨拶をしてくる仁美。彼女は、話してみると会場の受付役のようである。雪絵は、ゆっくり話しても

いられませんよ、と左馬ノ介に促され、辺りを見回す。仁美は済ました顔で、左馬ノ介のかしこまった青年の洋装を冷やかした。

部屋の中には式に参列する白峰や他の四聖、それ以外には見知らぬ男たちが数人いた。

そんな風に雪絵が辺りの人達を見回しているのを見つけて、白峰が寄ってくる。彼も一見して、普段と見た目がそれほど変わらない和装ながら、場に相応しい質と格の高い紋付の羽織袴姿だった。

まず、雪絵の出で立ちをチェックした白峰は、頷き、伴って歩いてきた男を紹介した。

「清家雅嗣^{まさし}と申します。雪絵お嬢にはお初にお目にかかります。いつも仁美が仲良くして頂いており、大変感謝しております」

「……………！」

男は、仁美の父親だった。雪絵は丁寧に挨拶を返す。このあたりは会合の席での余所行きが慣れたものである。彼は今日の挙式で、東西両家の媒酌人を務めるのだという。

「母さんは、隣室で準備中か」

「式の前はそっとしておけ。花嫁にも心の準備があるものだ。それに、花嫁衣装は式場で視た方が面白かろう」

そんな白峰の言に、それもそうか、と雪絵は頷く。

辺りをまた見回すと、他に見知らぬ男たちに混じって、知った顔がいた。持国と室泉だ。彼らは青刃からの式参列者の警護役だという。

「あそこに居るのは、どちらさま？」

と、視線で示す雪絵に、白峰は言う。

左隅にいるのが獅士堂の、白峰以外の四聖たちで、右隅にいるのが辰ノ神側の大幹部勢だという。彼らも、獅士堂側と反目する心と実際の距離がありながら、同じ社内で刻を待っている。

厳重な警備。揃った面子。入れ乱れるそれまでの敵味方同士。しかしそれで

も、刻限がくればあまりに自然に式は始まることになる。血で血を洗って来た二大家の融和が、時を刻み始めることになる。

社殿内に、祭壇を正面に緋毛氈がそこに至る花道を作り、その花道を挟み込むように両側に、参列する親族、組員、大幹部などの関係者が座った。

座る中には、雪絵や白峰もおり、彼女は小さな動きで周囲を見回す。

社殿の――それも結婚式用に準備した式場の様子は、金色が随所に荘厳に輝き、明るく雅で綺麗だった。赤城神社は割と社殿の改築にあたることの多い神社のようで、新し目の綺麗な式場だといえる。

ここでこれから、母さんは結婚式を挙げるのか――と、そう思うと当事者ではない雪絵の腹にも緊張感のつんとしたモノが広がる。

正面を視る。居並ぶ辰ノ神側の顔ぶれ――式前の面通しをして見知った顔がいくつかある。少し老けた辰ノ神の現頭首。高杉湊奈人の父、祓刀。そして、その実弟の飛呂人。そこに加えて、先程社務所内で視た辰ノ神側の現四聖の一部や、幹部などの武俠、俠客が顔を並べている。

やがて、式を執り行う神職と巫女数人が現れ、口上とともに笛や琵琶などの雅楽演奏が始まった。

いよいよ式が始まるのか、と雪絵や一同が気を整えた。

始まってみれば、新婦坂本春花と新郎高杉湊奈人の二人の結婚式は、東西の総元締めと次期頭首という組み合わせで行うにしては、自然で平素...
...まことに慎ましやかに式は進行し、執り行われた。

それは、式が始まる前に清家雅嗣が割と派手ではないのですよ、と雪絵に言っていたとおりだった。それが、この辺りは刀郷の昔ながらの気質が顕れているところだと雪絵に理解させた。

西方ならば政治的に、視る者たちに印象の華美な催しにして、民衆の心を掌握する手段として用いるし、そうした催し方は世界的にみても珍しいものではないというのが雅嗣の言だ。

だが、刀郷においての民衆の心を掴む在り方とは、象徴的存在や、それを政治的に利用することで生じる人気取りではないのだ。彼らは、刀郷で堅気民衆の心を掴み、治めるスジをちゃんと理解している。だからこそ、華美に走らず、大々的で華々しく自らを誇らない。

ただ、この結婚式は、問題は無事に済ませられるかどうか、ということと、その後の両家の問題と郷の趨勢こそが焦点だ。

雅嗣も、白峰も、獅士堂の四聖も、それを理解し、納得したうえで今日この日を迎えている。

一見、厳かに執り行われようとされる美しい式は、そうした水面下の緊張に満ち満ちている。

しかし、雪絵は入場し、厳かにバーজনロードを夫となる男と歩む春花の、その姿を視て、思った。

(綺麗だな.....)

(母さん、とても綺麗.....)

頭を綿帽子で覆い、化粧と紅をさした口許。白無垢の花嫁衣裳の春花。

やがて、金の神酒銚子から盃に酒を受け、それで契りを交わす二人の男女。

雪絵は、その後ろ姿を視て、静謐な空気の中でさわやかに思った。

(母さんが、幸せになりますように.....)

雪絵は、そんなことを自然に思った。

それは、彼女にとって初めての祈りだったかもしれない。

祝辞に雅嗣が 『蓮の台の半座を分かっ』 ということをして口にしていた。仲の良い夫婦となって欲しい、とこの場の誰もが思っていたかどうかは、それは誰にも分からない。

しかし、対座の男、高杉飛呂人が.....彼だけが、怨讐を捨てきらない眼で、春花たちと、獅士堂側の人間を睨んでいた。そのことを、雪絵はこの時、何も感じずにいた。

一日目の神式結婚式は、万事滞りなく、無事に済んだ。

その後は両家が不仲なことで、手短なカタチをとった披露宴だったものの、恙なく済ませられた。僅かな時間ではあったが、雪絵としてはこれまでの会合の席で食べた中でも屈指の料理——特に、特上の寿司が旨かった——に舌鼓を打ち宴会を楽しんだ。

そうして、この日の式催しは無事に宴もたけなわを過ぎ、両家の縁者で年長者にあたる祓刀と白峰が、共に東西のこれより先の関係良好を願う旨を述べた。後に、媒酌人である雅嗣の挨拶と掛け声で、一本締めが成された。

こうして、一日目は無事に誰一人も害をこうむることなく、結婚式のお目出度さに浸って解散していった。

式場から獅子堂邸に皆が戻ったのは、夕刻を過ぎていた。

明日を控える身である春花も帰邸した。

そして、今夜はまだすべて首尾よく済んだわけでもないのに、屋敷の男衆は呑めや歌えやのどんちゃん騒ぎを始めた。これにはさすがに、雪絵や白峰は式での疲労があったのだろう、普段見慣れている光景ではありながら、距離を置いて、早めにさがることにした。

春花だけは、楽しそうに、そんな組の皆を見詰めて微笑んでいた。

(母さんの胆力は凄いものだよね。疲れ知らずかと思うよ)

そんなことを思いながらも、夜が更けてくるとその身が心配になってくる。雪絵は女中が酒を運ぶのに混じって広間に戻り、依然として平気そうに酒をなめている春花に、

「母さん、明日もあることだし、そろそろ休んだら」

と、声を掛けるのだった。

「そうね。母さんはお休み時だわ」

それなりの酒が入っているにも関わらず、まるで素面で足取りも確かに、春

第五章 太刀の五

花は雪絵とともに離れの自室にさがっていった。

こうして、一日目はなんの問題もなく過ぎて行った。

明けて、長月末日。

今日の空模様は、海上から張り出した薄く、しかし灰色で光を通さない雲に覆われていた。前日同様、早朝から動き始めていながら、^{しよこう}曙光は皆を照らさず、影はおぼろげだった。

二日目は仏式の結婚式となる。場所は東のシマの、境界線上よりわずかに辰ノ神の西の四聖のシマにある寺院だ。

東西が神道と仏門の大家で治められていながら、前日の神式結婚式がそうであったように、西にも神社があり、東にも寺院がある。今回は、その東のシマの寺——それも獅士堂の^{ゆかり}縁の宗派の寺での仏前結婚式となる。

式に参列、警護に出向く俠たちが出払った獅士堂屋敷の広間で、雪絵は今日は任を解かれ屋敷でくつろぎに来た仁美と会う。

「やつほ、雪絵。昨日はお互い、お疲れ様」

「うん、仁美もお疲れ様。今日はここで春花さんの式が無事に済むのを待つんだね」

「ああ……、でも、どうせなら式場には紫恩さんもいるだろうから、私はそっちも行ってもよかったんだけどな」

「ふーん。それは御執心さまで」

「はっはっは。なんて言って、今はこの式が無事に済むことの方が大事だよな」

今日の式は、辰ノ神側のシマということもあり、辰ノ神側の人間が多く警護や参列することになっている。雪絵のみならず、昨日は全員が揃った獅士堂側の四聖も、今日は青刃の頭のみで白峰も屋敷に残っている。この辺りは、まだ互いを信用しきっていないことが顕れているということかもしれないが、それ

はお互い様なのかもしれない。皆暗黙のうちにこの状況を認めている。これはやはり、まだ迂闊に互いのシマに踏み入りたくはない、という感情の顕れかもしれない。

そんな話をする雪絵と仁美。しかし、広間で式後の屋敷での宴会を催すのに、大広間の準備がされているその座敷にいる二人は、他の組員がいて歓談している中に、奇妙な人物の姿を認める。

上座の正面脇に――普段なら四聖など幹部格が座る位置だ――ちょこんと座る人物。

見た目で僧衣と分かる出で立ち。女性だろうか、尼頭巾をかぶっている。口許も目元も穏やかで、しかし、どうも仏門の人間にしては……そして、侠たちの間にいるにしても、恐れ知らずの……そんな油断ならない肝の据わった風格ともいえる雰囲気醸し出している。そんな人物だった。

仁美もそれに気付いていたのだろう。雪絵にちょいちょいと耳を傾けさせて、小声で言う。

「雪絵よ。なんでお屋敷の、しかかも客間じゃなくて大広間の、それも頭の座の近くに尼さんがいるんだろ？」

「さあ？ でも、誰も何も言わないし……。お客さんなんじゃないかな」

雪絵の反応に、仁美は腕を束ねて首をひねる。妥当な推量だけれど、と続ける。

「お客ね。まあ、やっぱりそれならあり得るか。お膳で茶と菓子も出してもらってるみたいだし」

「うん、だよ。母さんの知った人か……。まあ、知り合いは多いだろうからね」

しかし、それにしても尼さんが何故？ という疑問は払拭されず、二人そろって腕を束ねて首を傾げるのだった。

刻限は、東のシマでの仏前結婚式の始まりが迫っていた。

「兄貴、これまで色々反対して悪かった」

そう切り出したのは、和の正装の高杉飛呂人だった。

式場——日暮里近くの本興寺——その式参列者の控えの間から歩いている湊奈人の周囲に人の気配が少なかったのをみて、飛呂人が声を掛けたのだ。

弟のモノ言いに、兄の湊奈人は最初、怪訝そうに彼を見遣る。飛呂人は言う。「俺も、昨日の式を視て感動したよ。もしかしたら、これを機にあの女性と兄貴の力が、この郷の東西をまとめて良くしていくのではないかと、そんな希望が俺にも湧き上がったんだ」

その言葉に湊奈人は破顔するでもなく、神妙そうな顔で頷く。

「そう思ってくれたならば、それは有り難いことだ」

あの人は言っていたよ、と湊奈人は妻となる女性、春花の控える間の方向を向いて言う。

「変わることに、変わることで、人はそうしていくことでより良くなれる。強さとは、弱さとは、その理解の過程にすぎない、とな。お前が憎しみよりも高い、気高い強さを得てくれるのならば、俺も嬉しいものだ」

「そうだな……変わることに、か……」

立ち止まって会話する二人に、通路を進んで清家雅嗣が今日の式進行の最終確認をすると声を掛けてきた。それに応じて、「ではな」と湊奈人は飛呂人の前から去っていった。

のこされた飛呂人は、小さく舌打ちをすると、寺院の中を歩く。

向かった先は、酒などの祝いの席で供される品が用意されている台所の控えだ。辺りは静寂に包まれており、今この場には飛呂人ひとりしかいないことが知れた。

御膳や神酒、三方に乗った祝いの盃などが目に入る。

飛呂人は、羽織の懐から折りたたまれた懐紙——小さな包みを取り出す。そしてそれを手の中でもてあそんだ。くっく……、と清い祝いの席の器具を汚すようなねっとりした笑みをもらす。

(あのクサレメス獅子どものいいようにされて、たまるものかよ)

飛呂人は手を伸ばす。

(変わることで、より良くなる……だと？ 何が変わるものか。ヤツらに斬られ逝った者たちの無念は、何が為されようとも永劫変わることはない……ッ！)

この憎しみは、変わらない。何故それが分からない。

ねっとり、こびりついている感情で、飛呂人はそれを塗り込んだ。

そして、二日目の式が粛々と執り行われ始めた。

式の本会場であるお堂には、参列者が左右に分かれ、昨日のように顔を合わせている。顔ぶれこそ昨日とは少々異にするが、主要な面子は揃っている。

獅士堂側は、雪絵や白峰などの四聖の代わりに、青刃のシマの頭や幹部、そして室泉が並んで座っている。辰ノ神側は自陣ということもあり、現頭首祓刀の四聖が勢ぞろいして、他に湊奈人と飛呂人の側近——関係者も参列している、といった具合だ。

お堂内で、婚礼に相応しい袈裟の法衣を纏った僧侶数人が、雅楽を奏で始める。

入堂のため、式場へと続く廊下を静々と進む春花は、小さく微笑むと、右隣りの湊奈人を見遣る。すると、彼の方も丁度春花の顔を視たところだった。

二人は小さく笑みを交わし、頷き合う。

この婚礼が色よく完遂されれば、東西二大家は正式に結びつくことになる。そうなれば、組自体もそうだが、この獅士堂側と辰ノ神側の二大総元締め傘下の組々や、シマにも変化が訪れることになるだろう。それは、総じてみると、郷そのものの治政の変革だ。

二人は、これまで刀郷が始まってより続いた獅士堂と辰ノ神という両家の、血で血を洗ってきた仇敵同士という関係と、憎しみの歴史に幕を降ろすことを望んだ。

それは、かつて汀の地を争いの場とし、かの組の犠牲のうえに成り立つ現在のかりそめの平穏……それを自分たちが結びつくことで本物としたいという、春花と湊奈人の願いだった。

歴史は悲惨だった。

多くの互いの頭たちが刀と流血に斃れ、仲間たちが傷ついた。そして、民堅気が苦しみ嘆き、辛い思いをさせた。

だが、時代は変わった。今こそ我らの血塗られた歴史に、新たな血の誓いと、互いの叡智で幕を降ろす。

二人は、互いの何でもない趣味の場での出逢いから、お互いの人となりを知り、素性を知り、警戒し合い、しかし話を続けてみて、共に食事をし、酒を呑み交わし、季節と共に語り合った。

そこに、仇敵同士の家柄という確執や妄念は無かった。二人は、獅土堂と辰ノ神——そして刀郷の未来を作る意志で、確かに分かり合った。そして、異性としての尊敬と愛情を確かめ合った。湊奈人は、春花の子が出来ないという告白に、しかし一緒になろうと告げた。問題は山積みだが、それがどうしたと湊奈人は思った。

雪絵にしてみれば、頻繁に夕餉の席に不在で、どこで何をしているのかと不満を募らせるその同じ時間を使って、春花と湊奈人は互いを知り、理解と愛を深め合っていた。二人は、互いが獅土堂と辰ノ神のトップに位置する事情を抱えて尚、互いの人柄への親しみを自ら裏切らなかつた。それほど、互いに親しみを覚え、馬が合う男女だったのだ。

湊奈人からみた春花は、朗らかで、穏やかで、優しい。しかし、時折、子供のような悪戯心をみせて、男を惑わし、振り回す。しかし、それが不快ではなく、むしろ男の器量を試されている印象が、この女に余計に自分をみせたくないような自尊心をくすぐるモノだった。それはある種、魔性にも似た魅力を持っていたといえる。

だが、そんな女性としての旨味のみならず、振るう刀は質実剛健。そしてなにより美しく、坂本春花という女性の優しさが交わる刀に載って伝わってくる。

彼女は大きな愛を以って刀を振るっている。

湊奈人は確信した。

春花からみた湊奈人は、流麗なたたずまいと、穏やかで冷静な物腰の年相応

の洗練を備えた男だった。読書サークルという趣味の場での出逢いということもあり、互いに書に親しむところから接近した。湊奈人は、春花と押さえるジャンルの違いこそあれ、柔軟な思考と姿勢を持ち、人と自分の考え方の違いを受け入れ、それを認める度量があった。

文官というから優男というわけではなく、刀も振るえる侠としての器量もある。単純な業前では春花の方が強いのが事実だっただろうが、しかし、彼は無闇な最強は求めていなかった。高杉湊奈人は、その人生で敗れることが多かった。だが、その敗れからも学び続けた。屈せず、前進と成長を続けた、それは、だからこそ、辰ノ神が『無敵』であることも重なる。誰にも屈しない『心』の持ち主に、真の敵が存在しないように、湊奈人の刀は敵が無いのだ。

そして、敵を憎まない、敗れた者の気持ちを分かってやれる男でもあった。

春花もまた、確信した。

自分たちの敵対する家柄にあって、歩み寄れる個性のバランス……このお互いが交われば、陰と陽の作用のように、より良い光が生じ郷を照らしていくだろうと。

獅士堂と辰ノ神。この両家の血塗られた歴史に終止符を打てるだろう、と。

春花と湊奈人の夫婦となる二人は、この結婚とその未来について、希望を持っていた。

「つまり、周りが反対の声をあげようと、政略結婚の向きもあると見なされて、組間の力関係がどうだ、政治的にどうだと言われても、結局、当人同士の気持ちが肝要なんだよ」

「ほうほう」

仁美が茶を飲みながら、雪絵にそう言って聞かせた。

「立場で結婚を左右されるってこともあるし、それで結ばれないってことも、古今東西そりゃ多くあっただろうさ。でも、獅士堂と辰ノ神の場合、そろそろいい頃合でもある気がするんだ」

明治維新から一世紀近くが経とうかって時分だしね、と仁美は屋敷の天井を見上げる。歴史のある武家屋敷風の日本家屋だ。それはもう、年季がはいっている。

「私は、二つの組のいがみ合いとか、よくは分からないけれど、東の方と陰悪なのは、色々な組員の言動から伝わってきていたよ。それでも、その仲は良い方向に行くというの？ 仁美は」

「というかね、良い方向に行かせるための、その意志を持った今回の結婚でもあるんじゃないか。春花さんも向こうの新郎も、これを機に両家の仲をより良くして行きたいからこそ、多少の反対や問題があっても踏み切ったんだと思う」

「そうか……。そうかもね」

「ああ。それで郷も良くなればイイ。アタシはそう思うね」

雪絵は、先程の仁美のように、湯のみを持って天井を仰ぎ見る。

「だったら、本当にうまく行って欲しいよね。この結婚」

「それと、今後な」

「うん。母さんの願いが届くといいな。まだウチにも向こうにも、反対の肚を抱いている人はいる。そういう人達も含めて、良くなっていくといいな……」

「ま、今は待つしかないでしょうよ。……。うーん、大丈夫だよ、きっと」

「……。うん」

黒い瞳に映るのは、赤い湯呑茶碗。それに、ゆっくりと口唇を近づけていく雪絵――。

一瞬。

春花の緋色の瞳に鋭い光が灯った。

念珠の授与、そして新郎新婦による誓いの詞を経て、雅楽が奏でられる中で誓いの盃を干す段になった。

そして、受け渡された赤い盃を手にし、視た瞬間だった。

――ヴィジョンが重なった。

盃を受ける自らのヴィジョン。

未来視で、数週間前に視た、この結婚式の本題ともいえる予知。

それが今、目の前に現れてきたのだ。

春花は考える。

(この盃を受けた後に、これを機に、私の未来が決まる。私と、雪絵の未来が動く.....)

春花は、角隠しに陰る目元で、静かに手にした盃をみつめた。

その背後.....右席に座る高杉飛呂人が、その口許を抑えきれず歪めた。

.....続く。